

## カトリック山手教会月報

## やまて



編集・発行 カトリック山手教会 広報委員会 〒231-8652 横浜市中区山手町44番地  
 ☎ (045) 641-0735 <http://catholicyamate.org/>  
 第610号 2020年12月13日

## 鈴木真師主日ミサ説教

9月6日・年間第23主日：マタイ18・15-20

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」…、昔から大好きな箇所です。でも後から知ったのですが、これはイエスが実際に言ったわけじゃなく、復活のキリストが、キリスト者の集まりの中にいつも臨在している、という言わば初代教会の体験であるようです。

「一人」じゃないのがポイントですね。無論、わたしたちは「一人」でも神さまに向かいます。でも、大事なのは「共に」ということなのでしょう。「主の祈り」の主語が、「わたし」ではなく「わたしたち」であることも重要なポイントです。神さまとわたしたちとの関係は、よく「垂直」と「水平」、と言われます。「わたしと神さま」という関係もあるけれど、それだけ、というのはあり得ない。いつも「わたしたち」という横のつながりの中に、神さまのはたらきがあります。

「神の国はあなたがたの間にある（ルカ17・21b）」、前にも言いましたが、「神の国」と訳された〈バシレイア〉というギリシャ語は、神さまがまさにそこではたらかれています、ということを表す言葉です。だからこそ、第2朗読のロマ書の中で、パウロは「愛は律法を全うするもの」というわけです。「わたしたち」の関係性の中ではたらく神さまの愛のわざに気づく時、わたしたちは自然と「人を愛する」という行為に導かれるのではないのでしょうか。このコロ

ナ禍の中、「共に」がいろいろと難しい現状が続いています。「共に祈る」ことさえ、以前のように簡単ではありません。でもだからこそ、実際にあまり会うことができなくとも、心を合わせるのが大事で、そのための方法もいろいろとあるのではないかと、思います。

「あなたがたのうち二人が地上で心をつにして求めるなら、わたしの父はそれをかなえてくださる」一日も早いコロナの収束を願いつつ、わたしたちが「共に」ある時、イエスもいつも「共にいてくださる」ことを感じるができるよう、願いたいと思います。

